

一般社団法人国際女性教育振興会山梨県支部

古屋詔子さん、千須和百合子さん、林徳子さん

今回の地域活動レポートは、国際的な視野を持ち、人権尊重の理念を社会に根付かせ、真の男女共同参画社会実現のため活動を続け、設立35周年を迎える一般社団法人国際女性教育振興会山梨県支部を紹介します。古屋詔子さん、千須和百合子さん、林徳子さんにお話をうかがいました。

国際女性教育振興会は、どのような団体でしょうか。

古屋 国際女性教育振興会（以下、国女振）は、海外視察研修や国内研修を通じて、地域社会に国際的視野を持つ女性たちの育成を図ることを目的とした組織です。

昭和35年に旧文部省が主催して始められた「婦人教育海外派遣団」に、全国から参加した女性たち150名によって、昭和46年、「国際婦人教育振興会」の名称で創設されました。

ちょうどこの頃、日本各地で婦人教育の必要性が叫ばれ、教育のための拠点づくりが進められるようになりました。ぴゅあ総合も以前は、山梨県立総合婦人会館と言う名前でした。婦人という言葉が使われることはずいぶん減りました。

その後、全国組織とするため各地で支部が誕生し、現在17の支部が活動しています。山梨県支部が設立されたのは、昭和56年ですから、今年で設立34周年になります。現在、支部会員は50名（内、本会員25名）が所属しています。

県支部初代会長は市川三郷町出身の奥野繁子さんです。私は奥野さんとの交流から国女振の活動に興味を持ち、参加することになりました。支部設立から現在に至るまで、先輩会員の奮闘はもとより、県社会教育課からまたいへん尽力いただいています。こうして30年以上にわたり活動が継続できているのです。

国女振ではどのような活動を行っているのですか。

古屋 国際的な視野を持つ女性リーダーの育成を目指す国女振の大きな事業のひとつが、「海外視察研修」（以下、海外視察）です。この事業は毎年、10日前後の研修を本部が企画し、各支部から参加者を募って実施しています。

山梨からも毎年2名から多い時で5名が参加しています。県支部初の研修地はイギリスでした。その後もヨーロッパ、アジア、オセアニア各国へと多くの仲間が旅立ち、見聞を広めています。

研修地では、その国の歴史、教育、福祉、男女共同参画や多文化共生など、あらゆることが学習テーマとなります。昨年はドイツとポーランドが視察地でしたが、ドイツでは幼児期からの自律教育と職業教育、政策決定現場への女性進出の実情、高齢者や障害者への支援策、再生可能エネルギーについて学びました。またポーランドでは、歴史遺産を通して平和と教育を考える、女性の社会参画の実情と課題、育児支援、女性の働き方などが視察テーマでした。

訪れる国それぞれが、独自の歴史と文化を持っています。例えばポーランドは、18世紀から第1次大戦までソ連とプロシア（ドイツ）、オーストリアに囲まれ、120年余の間、世界地図からその名前が消えた悲劇の国です。また第2次世界大戦ではソ連に組み込まれ、1989年のソ連崩壊までの間、共産圏の国でした。戦後70年が経つとは言え、こうした歴史を持つ国では、女性の生き方も日本とは異なる部分があるのではないのでしょうか。本を読むだけでは知り得ないことを、体験できる機会というのは貴重です。毎年海外視察に行かれた方々からは、



古屋詔子さん



千須和百合子さん（左）、林徳子さん（右）

海外視察研修報告会という形でそれぞれの体験をお話いただいています。

もうひとつの事業は、「やまなし女性国際セミナー」（以下、セミナー）です。昭和59年から30年以上継続して開催しています。セミナーは、支部が山梨県教育委員会からの委託を受けて企画、開催しています。毎年4回シリーズになっており、講演会やシンポジウム、そして海外視察研修報告会などを行っています。

1年間のテーマや内容は、執行部案を基に50名の支部会員が話し合いながら決めています。企画したセミナーには会員以外にも聴講いただけるよう、セミナー会員という形で広く募集しており、毎年多くの方に受講いただいています。

これまでに元文部大臣の永井道夫さんや赤松良子さん、言語学者の金田一秀穂さんなど著名な方々を講師にお招きしてきました。なかでも、平成15年のベアテ・シロタ・ゴードン（Beate Sirota Gordon 1923～2012）さんの講演は、私たちの大きな活動成果のひとつだと思います。

ベアテさんは、ウクライナ系ユダヤ人の父母を持ち、少女時代は日本で育ったフェミニストです。太平洋戦争終結後、日本国憲法の制定に関わった人物として知られています。特に草稿を執筆したと言われる日本国憲法第24条（家族生活における個人の尊厳と両性の平等）には、戦後期の女性たちの多くが、明るい未来を想い描いたのではないのでしょうか。

私たちがセミナーで取り上げるのは、国際的な視野の育成をメインテーマに、男女共同参画やまちづくり、環境など多岐にわたります。昨年のセミナーでは、学習院大学法学部教授の野中尚人さんに、「政治と暮らし」と題してお話いただきました。女性がもっと政治に関心を持ち、男女共同参画社会の実現の一助になればとの思いからです。

活動がどのようなところで活かされているのか教えてください。

林 海外視察は、異文化に接し、視野を広め自己啓発することが出来ます。また、海外での貴重な体験は地域リーダーとしての資質向上にもつながると思います。一方、国女振が開催するセミナーは、会員だけでなく一般の方も参加されますので、地域の方々と一体感をもって学び合う素晴らしさがあります。

会員の中には国女振としての活動だけでなく、他団体や地域においても頑張っている方が大勢います。国女振

の活動と他団体での活動が連携されることは、より一層大きな成果が得られると思います。

たとえば私は、地元の甲州市で男女共同参画推進委員を務めていますが、推進活動を進めるさまざまな場面で国女振での学習が役立っているなど実感することがよくあります。

昨年度、甲州市では防災をテーマにしたフォーラム（体験を聴き、みんなで語り合うワークショップ）を開催したのですが、その前に行われた国女振のセミナーが、県防災安全センター長さんの講演「安全と安心な社会づくり～災害から身を守る～」であったため、地元のワークショップで、たいへん役立ちました。

今後、活動していくうえでの課題はありますか。

千須和 海外視察は、会員でなくても参加が可能です。意欲ある女性が身近にいれば、会員でなくても参加をお奨めします。一般の方が海外視察に参加する機会というのはそうはありません。渡航費用の負担は決して小さくはないのですが、大使館をはじめとしたさまざまな機関や施設への公式訪問など貴重な体験が出来ます。問題は視察後、一緒に活動していただける仲間となっていくまでに、なかなか至らないことです。難しいですね。

これからの課題は会員の高齢化です。今、女性団体の多くがこの課題に直面していますが、若い方は今、子育てだけでなく、社会でも男性同様に働いています。こうした活動に時間を割くのは簡単ではありません。かつての先輩会員たちは、全員で北京女性会議（1995年）に参加するなど、現在より熱心に活動していたと聴きます。30年余り続いた活動をなんとか次の世代にバトンタッチしたいと思います。

古屋 東京の本部で行われる支部長会議にうかがうと、多くの支部が同じ悩みを持っていることを実感しますが、そうしたなか、福島支部では東日本大震災という未曾有の災害にも負けることなく、精力的に学習活動していると報告して下さったことがありました。被災地からのこうした声は、本当に励みになります。

これまで一緒に活動してきた仲間は、県議会議員、市町村議会議員、教育委員、社会教育委員、人権擁護委員、男女共同参画審議委員など多方面でリーダーとなって活躍しています。今後も経験と学びを深め、成果をそれぞれの地域で活かすことが出来ることを願っております。